様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３４５

研究課題名（和文）虚構の現実、リアルなフィクション：英米文学と「親密さ」という現象に関する一考察

研究課題名（英文）Fictional Reality, Realist Fiction: Intimacies in Works of British and American Literature

研究代表者
若菜　マヤ（Wakana, Maya Higashi）

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：８０２０１１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,500,000円、（間接経費）　1,050,000円

研究成果の概要（和文）：日常は「表現された秩序」だと唱えたミクロ社会学者、E. ゴッフマンの理論をH.ジェイムズの文学作品に重ね、ジェイムズ文学は現実の虚構性をリアルに描いたものだと＊Performing the Everyday in Henry James’s Late Novels＊（Ashgate, 2009）で主張。今度はジェイムズが高く評価したAusten、Wharton、G. Eliotの作品に同様の分析を行い、インティマシー（「親近感、近しさ」）をテーマに単著＊Performing Intimacies of the Everyday＊（仮）を書き上げ、英米の某学術出版社の外部審査用に準備中。

研究成果の概要（英文）：I claimed that Henry James's fiction reflects life's fictional, constructed quality. I therefore reasoned that the theories of 20th century microsociologist Erving Goffman, who claimed the same and analysed the constructed nature of face-to-face everyday life, must be relevant as a tool of literary analysis. This past project culminated in the publication of my monograph, *Performing the Everyday in Henry James's Late Novels* (Ashgate, 2009).

My book project, tentatively entitled *Performing Intimacies of the Everyday* moves beyond James. I analysed selected works by authors James is famously known to have admired, such as Jane Austen, Edith Wharton, and G. Eliot, employing theories of relationship studies, social psychology, contemporary philosophy, and microsociology with a focus on understanding the phenomena of intimacies. A reputable British/American academic press has just invited me to send in the book manuscript for outside peer review.

研究分野：文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ヘンリー・ジェイムズ　ジェーン・オースティン　イーデス・ウォートン　ジョージ・エリオット　ミクロ社会学的分析　インティマシー（親近感、近しさ）　シナリオ　「顔」

１．研究開始当初の背景

（１）欧米の文学作品研究の大きな流れとして、ニュー・ヒストリシズムやマクロな社会学的観点から作品を分析する、というものがある。文化史的研究を始めとして、民族、階級、出版事情、衣装、契約思想、食物、教育、ジェンダー問題、そしてセクシュアリティーに至るまで様々な角度から研究が進められ、一方で心理学的なアプローチも一時盛んであった。

（２）そのような状況下で、当該研究者はこれまでの研究に本格的なミクロ社会学的視点が欠けている事に気付いた。ミクロ社会学者ゴッフマンの名前は頻繁に様々な論文に出てきても、ミクロ社会学的な視点を十分理解した上での言及でなかったり、ひどい時は誤った理解の仕方であることもあった。当該研究者はこの現象を次の二点に由来していると考えた。一つは、クロース・リーディング、つまり作品を丁寧に紐解き・分析する流れはもう古い、あるいはもう既にそう言ったやり方で得られる新たな知見は無い、とする考え方の優勢である。もう一つはミクロな、つまり対面行動的次元での人間の行動を支配する規範と、よりマクロな次元の社会を支配する規範とが時として重なることもあるが実は別物であるということに読者・研究者たちが十分に気付いていないからではないか、ということである。

（３）マクロな視点（ジェンダー、社会的、経済的、法的視点）に加え、これとは異なるミクロ社会学的・社会心理学的視点をジェイムズ、オースティン、ウォートン、エリオットの文学作品分析に導入することで、マクロな次元とミクロな次元それぞれを支配する規範のせめぎ合いの中で、混乱し、翻弄される社会化された人間の姿が炙り出されると考えた。当該研究者はこれらの作品には現代社会の根底にある礼儀正しさ（civility）が持つ、見えない疎外、束縛、つまり、規範にかなった振る舞い、態度、反応の仕方における人間のジレンマという普遍的かつ今日的（21 世紀的）テーマが潜んでいると考えた。

（４）ミクロ社会学者的文学者としてのジェイムズは既に出版された単著及び、その他の論文（アンソロジー形式のもの）で主張済みだが、ジェイムズに加えてホーソーン、オースティン、ウォートン、そしてジョージ・エリオットについても同様のことが主張できると考えた。

（５）当該研究のように、「恩」や厚意の貸し借り勘定などの不文律的な次元にまで踏み込み、ミクロ社会学的な意味での「顔」の問題を作品分析の中心に据えたものはなかった。今回はジェイムズが高く評価した四人の作家の作品に同様の分析を試み、ジェイムズがそれぞれの作品の中に何を見ていたか大胆に推理しながら当該研究者の研究手法の可能性をさらに広げようとしている。

２．研究の目的

文学作品のミクロ社会学的分析手法の確立・展開

（１）本研究は、H. James, E. Wharton, J. Austen, G. Eliot の文学作品を分析素材とし、ミクロ社会学的分 析手法を確立･展開することを目的とする。人は対面行動を行う際、経済やシェンター等の「マクロ」な次元の社会規範に加え、「ミクロ」な次元の諸規範に従うように社会化されている。この重層的な諸規範に翻弄される人間の姿を正確に捉えたと申請者か考える作家群の内、シェイムスについては既に単著 *Performing the Everyday in Henry James's Late Novels* (Ashgate, 2009)で主張済 みたか、彼か評価したウォートン、オースティン、エリオットたちの作品についても、哲学や社会心理学分野での研究成果を取り込みつつ、大胆な分析を提供することで分析手法か有益かつ有効であることを示す。

（２）本研究ではホーソーン、オースティン、ウォートン､エリオットなどの作中人物たちは、ヨーロッパ人であれアメリカ人であれ、その場の空気を読み、その場の規範に従って行動するよう社会化され、日常生活を支配するこれら諸規範に従ってその「場面」を演じ切ろうとする演者であるという前提に立っている。ホーソーンの「牧師の黒いベール」、オースティンの『高慢と偏見』、ウォートンの『イーサン・フロム』、『無垢の時代』そしてジョージ・エリオットの『フロス湖畔の水車小屋』で繰り広げられる世界を「表舞台・裏舞台」、「スティグマ」、「顔」、「マクロ及びミクロの次元の社会規範のせめぎ合い」、「親密さ」、「感情移入」をキーワードにダイナミックに分析することを目標とした。これらの作家たちはジェイムズ同様、それぞれの作風を維持しつつ､現代社会における 社会規範にかなった振る舞いをしようとすると生じる大いなるジレンマを浮き彫りにし、その構造を解明しようとしていたのではないか。当該研究者はこの仮説の妥当性の検証を目指した。

３．研究の方法

（１）当該研究者は、社会心理学理論や文化社会史研究などの助けを借りながらも、あくまでも作品を丁寧に紐解き、具体的な日々の営みの中に潜む束縛の要因を洗い出す作業を手がけている。文学批評の先行研究についても主たるものについては可能な限りすべて目を通し、ミクロ社会学的分析に資するものをうまく論文を執筆する際組み込んで、順次論じた。

（２）最初はミクロ社会学者アーヴィン・ゴッフマンの理論を専ら使っていたが、社会心理学やコミュニケーション・スタディーズ、ひいては最新の哲学理論にも手をのばし、なるべく垣根を取っ払った形で自由に論じるよう心掛けた。文学作品の作中人物たちの「礼儀正しさ」は、挨拶をする･しないという次元のものに加えて、半ば習慣化した反射的ともいえる次元のものにも及ぶが、例えば誰かの「顔」がつぶされ、気まずい空気が流れると、対面行動を可能にしている暗黙の了解事項や前提がすべて崩される。そこで対面儀式の参加者はその場を繕うために自らの直接的な利益に反する行動を厭わない。何

かの「ふり」をし、後になって考えると説明のつかない言動に出てしまうことも厭わない。そのような振る舞いが社会的に要請されているからである、という具合に、それぞれの作品とミクロ社会学理論を重ね、作品分析を行った。
（３）夏の一カ月と春の 3 週間近く、集中的にヴァージニア州立大学の図書館で資料収集、論文執筆、そして研究者との懇談を重ねて研究を進める地道な研究方法である。洋書が一カ所の図書館に全て揃い、あるいは他大学から快く取り寄せてもらえ、当大学の研究者たちから論文に対するフィードバックを得る為、懇談し、アドバイスがもらえるという優れた研究環境がこの研究を円滑に進めるためには必要不可欠である。

４．研究成果
（１）当該研究者の単著、*Performing the Everyday in Henry James's Late Novels*（Ashgate, 2009）の出版関連の作業に思いの他時間をとられ、予定が少し狂ったが、次に出版を目指している単著、*Performing Intimacies of the Everyday*（仮題）の中のホーソーンの「牧師の黒いベール」論（単著原稿の序章及び結論部分で展開、生きている人間の顔が見えないことの意味を論じる）、オースティンの『高慢と偏見』論（第一章、ホストとゲストという概念を中心にミクロ社会学的に分析）、ウォートンの『イーサン・フロム』論（第二章、痛みの管理という概念を中心にミクロ社会学的に分析）及び『無垢の時代』についての論文（第三章、音楽やシナリオという概念を中心にミクロ社会学的に分析）、さらにジョージ・エリオットの『フロッス湖畔の水車小屋』論（第四章、第五章、それぞれ感情と思考の関係あるいは音楽、シナリオ、アイデンティティーを中心に据え、ミクロ社会学的に論じる）がまとまった。書き溜めた書籍原稿はワード数にして約 110,000 words となる。
（２）次に出版を目指している単著で取り上げる作家を束ねるテーマは intimacy だが、読者と筆者の間、登場人物同士の間に生じる intimacy はそれぞれ empathy（感情移入）の作用により浮き上がる。人と人が「親しい」(intimate な）関係になったりならなかったりするメカニズム、あるいは必ずしも「理想的な」親しい関係でなくとも何らかの近しい関係を築く人間の営みをミクロ社会学で言う「顔」の問題を中心に据え、ホストとゲスト、痛みの管理、病気の役割、音楽の作用、感情と思考の関係、あるいは日常のシナリオ制などについて、文学作品を紐解く中で論じ、浮き彫りにした。
（３）文学作品の中に描かれている感情と理性の関係、シナリオを日常生活の関係、ひいては文学と現実の関係について非常に興味深い結論を導き出したと考えている。
（４）最後になったが、先だって出版された単著 *Performing the Everyday in Henry James's Late Novels*（Ashgate 2009）に関する書評が *Times Literary Supplement*（2010 年 4 月 16 日号）を始めとしてその他の米国の学術雑誌に 2 件（計 3 件）、さらに、2011 年にその前の年に出版された顕著な英米文学関係の研究書として *The Year's Work in English Studies* Vol. 90 (Oxford Univ. Press, 2011, p. 783) に当該研究書も名を連ねたが、このような展開が幸いしてか、今回の成果物として出版を希望している *Performing Intimacies of the Everyday*（仮題）についても具体的な展開があった。2014 年 5 月 20 日付けで、英米で展開している定評ある某学術出版社から「書籍原稿を外部審査に出すので添付ファイルで送って下さい」、という book proposal に対する審査結果が出た。書籍原稿は最終確認が済み次第、その出版社に送付したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０　件）

〔学会発表〕（計　５　件）
① Maya Higashi Wakana
"Things, Faces, and Emotion in Henry James's *The Spoils of Poynton*." Scheduled to present at the 6th International Henry James Society Conference, 2014. July 16－19, 2014. Aberdeen, Scotland.

② Maya Higashi Wakana
"Bodies Speaking in George Eliot's *The Mill on the Floss* (1860)." The 45th Northeast MLA (NEMLA), April 3－6, 2014. Harrisburg, Pennsylvania.

③ Maya Higashi Wakana
"Everyday Aestheticism in Wharton's *Ethan Frome*." Edith Wharton in Florence 2012 Conference. Florence, Italy. June 6－8, 2012.

④ Maya Higashi Wakana
A Microsociological Analysis of Henry James's "Paste" (1899). Fifth International Conference of the Henry James Society, "Transforming Henry James." John Cabot University, Rome, Italy. July 7－10, 2011.

⑤ Maya Higashi Wakana
"Fashioning the Self in Wharton's *The Age of Innocence*." 42nd Northeast Modern Language Association (NEMLA). New Brunswick, New Jersey. April 7－10, 2011.)

〔図書〕（計　１　件）
① Maya Higashi Wakana
"Value in Henry James's 'Paste' (1899): Understanding James as a Microsociologist." *Transforming Henry James*, eds. Donatella Izzo, Anna Despotopoulou, Anna De Biasio. Newcastle, UK: Cambridge Scholars Publishing, 2013. 319-333. (全体：466 頁)

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
http://research-db.ritsumei.ac.jp/Profiles/35/0003489/profile.html

６．研究組織
(1)研究代表者
若菜　マヤ（WAKANA, Maya Higashi）
立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：80201143

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：